

1 全国学力・学習状況調査結果の概要

(1) 平成28年度の傾向

平成25年度から悉皆調査となり、年度によって調査問題の難易度は変わるものの、全国の結果やこれまでの寒川町の結果を今年度のものと比較することで、今後の対応につなげてきたが、これまでの取り組みについての評価をしていく上で、着目したいのが「中央値」である。

平成28年度 全国と寒川町との中央値の比較

【小学校】

	国語A (全15問)	国語B (全10問)	算数A (全16問)	算数B (全13問)
全国	12.0	6.0	13.0	6.0
寒川町	10.0	6.0	13.0	5.0
全国との差	-2.0	0.0	0.0	-1.0

【中学校】

	国語A (全33問)	国語B (全9問)	数学A (全36問)	数学B (全15問)
全国	26.0	6.0	23.0	6.0
寒川町	24.0	5.0	20.0	5.0
全国との差	-2.0	-1.0	-3.0	-1.0

「中央値」とは、対象範囲内の全ての児童または生徒を得点順に並べたとき、ちょうど真ん中にいる児童・生徒の得点のことで、中央値に開きがある場合は、全体の平均正答数に同等の開きが表れてくる。

中央値と平均正答数のモデル

- 中央値が等しい場合



- 中央値が低い場合



このことから、寒川町の全体的な傾向について分析する。

【小学校の傾向について】

平成28年度 全国と寒川町との中央値の差と平均正答数の比較

【小学校】

	国語A (全15問)	国語B (全10問)	算数A (全16問)	算数B (全13問)
中央値の差 (寒川-全国)	-2.0	0.0	0.0	-1.0
平均正答数 全国	10.9	5.8	12.4	6.1
平均正答数 寒川町	10.0	5.3	11.8	5.5
平均正答数 全国との差	-0.9	-0.5	-0.6	-0.6

中央値と平均正答数の差という観点から基礎的・基本的な学習内容（知識）の定着度が分かる「小学校国語A」「小学校算数A」について傾向を述べていく。

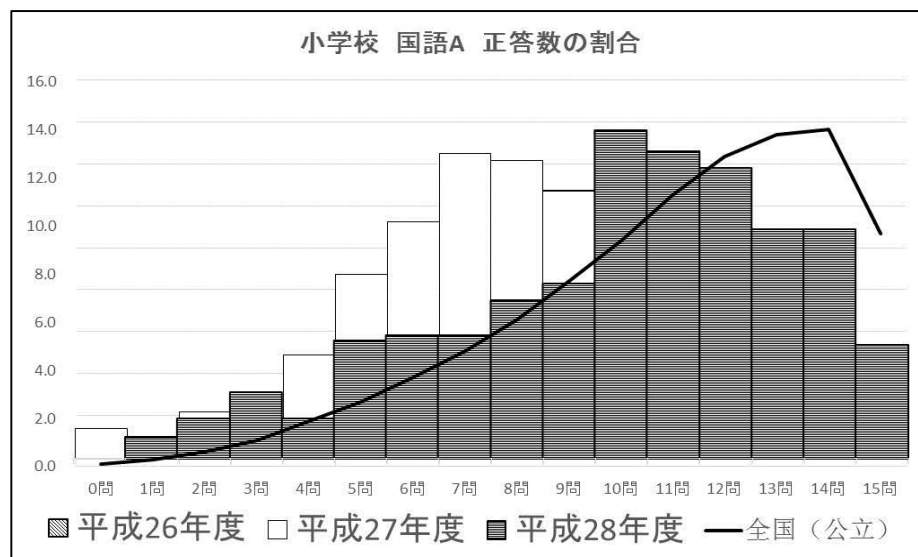
「小学校国語A」については中央値において全国との差が-2.0問であるのに対して平均正答数は-0.9問である。また、「小学校算数A」については中央値においては差がないのに対して、平均正答数では-0.6問である。

つまり、「小学校国語A」については、中央値より低得点層の得点が全国の水準以上であるか、高得点層が全国の水準以上かのどちらかであることが考えられる。

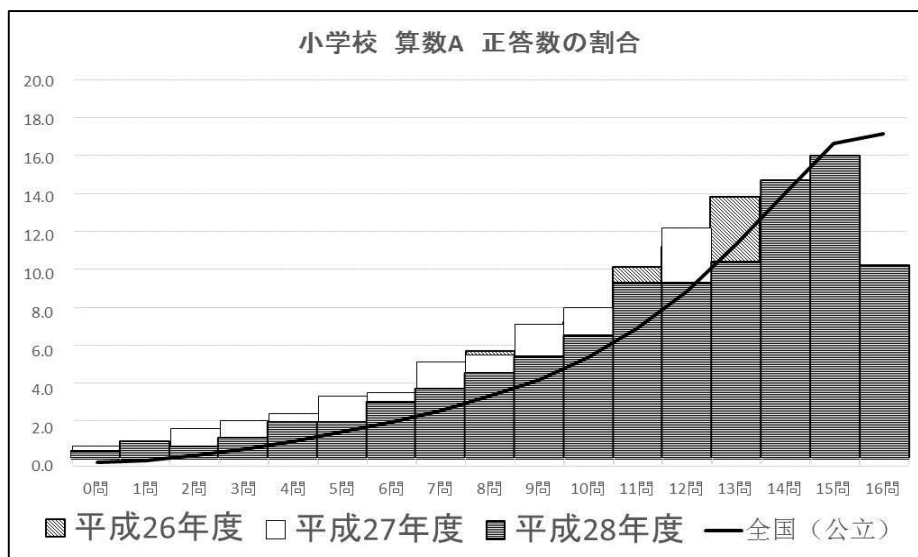
逆に「小学校算数A」については、中央値より低得点層の得点が全国の水準以下であるか、高得点層が全国の水準以下であるかのどちらかであることを示している。

この評価については、今年度の結果とこれまでの結果を比較することで、これまでの取り組み対する成果を読み取ることができる。これについては、直近3年の結果を重ねたグラフを見ることで、比較することが可能である。平成26年度の結果の上に平成27年度を、その上に平成28年度を重ねると、平成28年度のグラフより出ていれば割合が多いことを表し、逆に見えていなければ割合が少ないことを意味している。

また、折れ線グラフについては、平成28年度の全国の傾向を示している。

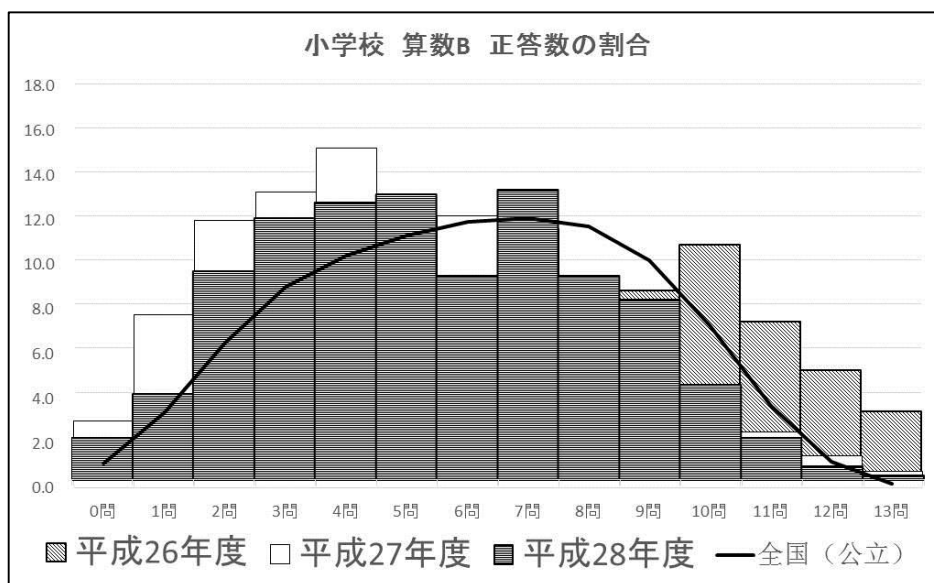
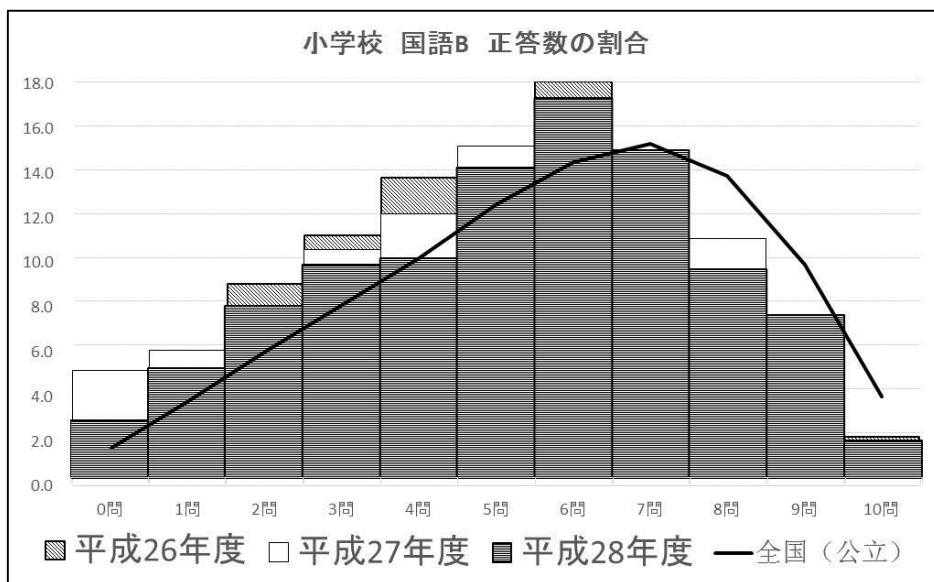


「小学校国語A」については、全国のカーブと同様の傾向であるが、ピークが少し低得点寄りになっているので、中央値としては差が出ている。しかし、中間層の割合が多いこと、低得点層が水準程度になってきたことから、平均正答数については開きが縮まっている。また、平成27年度のグラフが見えていることから、ピークについては高得点に寄ったこと、低得点層が大幅に減ったことから、主として知識に関する事項について習得できている部分が増えていると考えられる。



「小学校算数A」については、全国のカーブと同様な傾向であるが、中央値である13問以下が少し多いことと、13問以上正答している児童が少ないことから、平均正答数が0.6問という結果となっている。また、平成26年度、27年度のグラフが低得点層において見えていること、逆に高得点層では今年度のグラフが

大きく伸びており、全国のグラフのピークと同様の傾向になったことから、知識に関する事項について習得できている部分が増えていると考えられる。



「小学校国語B」「小学校算数B」については主として活用に関する問題であるが、同様に分析をすると、低得点層については前年度より少なく、高得点層については全国のカーブのピークを境に、その水準より下回る傾向にある。つまり、全国的に正答率の高い問題については正答率が上がっており、より活用を求められる問題については誤答、無回答が多いという結果である。

これらのことから、次の2点を寒川町の小学校の今年度の傾向として定義する。

小学校の傾向

- ① 基礎的・基本的な学習事項については、これまでの取り組みによって定着に一定の成果が見られる。
- ② 基礎的・基本的な学習事項をもとに、それらの活用を考える活動が求められている。

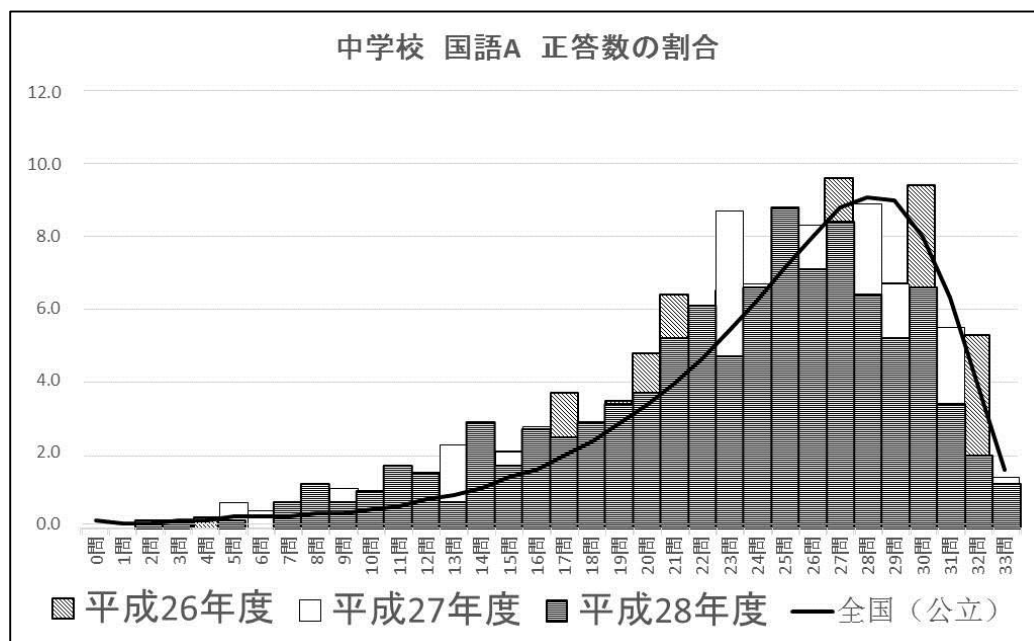
【中学校の傾向について】

平成28年度 全国と寒川町との中央値の差と平均正答数の比較

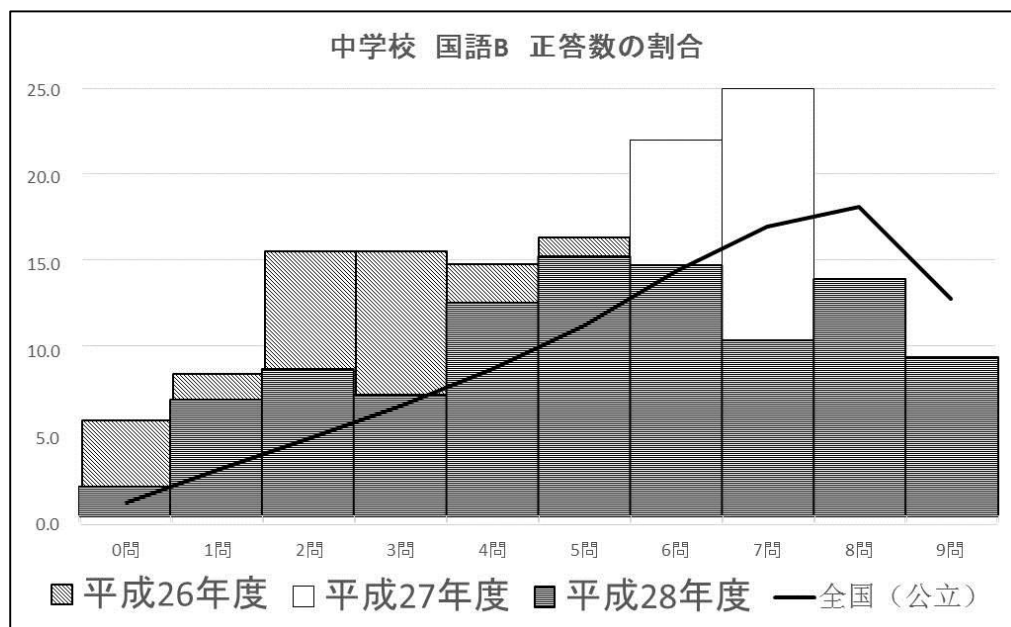
【中学校】

	国語A (全33問)	国語B (全9問)	数学A (全36問)	数学B (全15問)
中央値の差 (寒川-全国)	-2.0	-1.0	-3.0	-1.0
平均正答数 全国	25.0	6.0	22.4	6.8
平均正答数 寒川町	23.0	5.3	19.5	5.4
平均正答数 全国との差	-2.0	-0.7	-2.9	-1.4

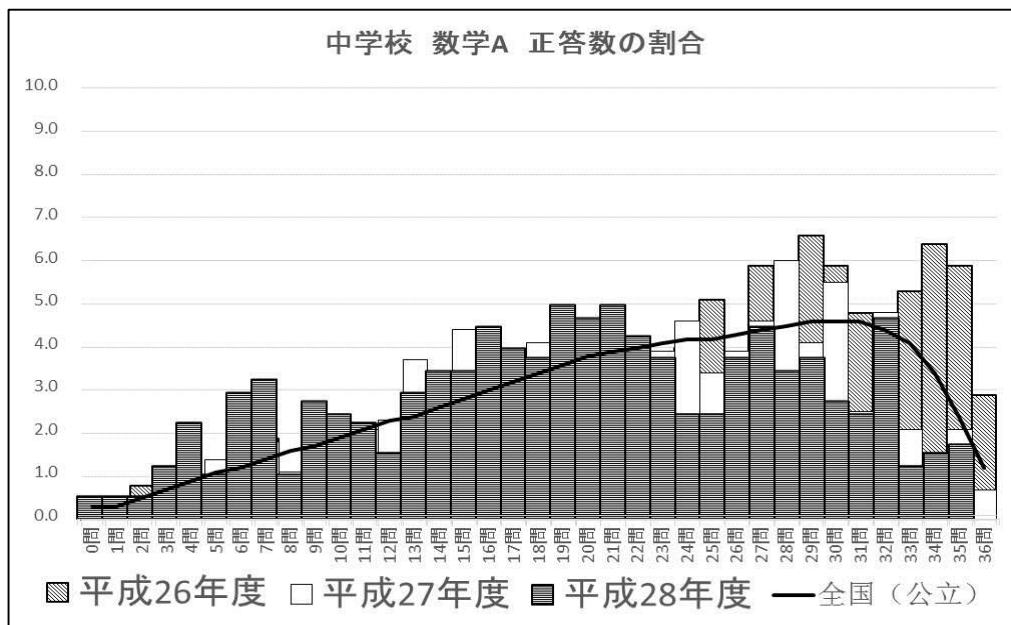
中学校においては、全国との中央値の開きと平均正答数の開きが同等であるため、全体的に正答数が低い傾向である。



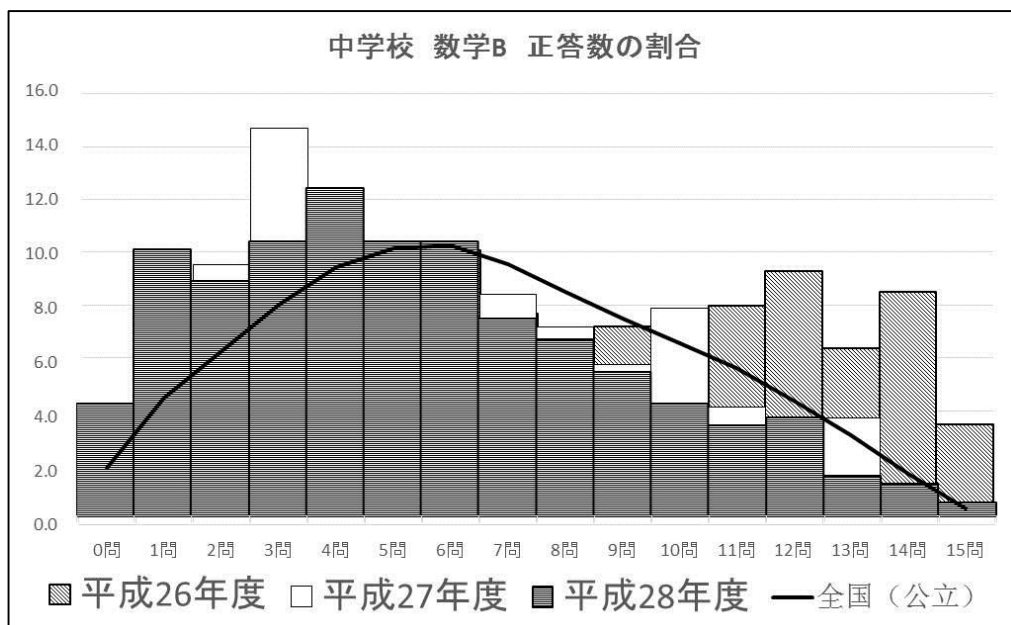
「中学校国語A」については、ピークが全国のカーブより低得点に寄っており、また、低得点層については、全国水準より割合としては高くなっている。昨年度との比較においても、中央値、平均正答数は同等であるが、ピーク付近の割合が少ないことから、平均正答率については低くなっている。



「中学校国語B」については、昨年、一昨年の全国のカーブとの違いはあるものの、ピークが大きく低得点寄りになっており、昨年度の分析にある「的確に捉え理由を説明する」「事象を自分の力で読みひらき、自分の考えを持ちながら、それらを適切に表現する」といった力（PISA型学力）の定着については課題が残る結果である。



「中学校数学A」については、全国のカーブ、過去2年との比較において、いずれも水準を下回っている。特に低得点層、中間層、高得点層の3つに山が分かれているのが特徴である。特に低得点層については基礎的・基本的な問いについて正答しておらず（詳細は後述）、その対応が急がれる。



「中学校数学B」については、直近3年のいずれも中央値において全国との開きが-1.0問という傾向にあり、カーブについても全国の水準と同等である。しかし、正答数の割合がカーブのピークより低得点寄りに多いため、平均正答数では-1.0より開きが大きくなっている。主として活用に関する問題という性質を考えると、活用していくのに必要な知識の習得（数学A）において課題があるため、基礎的な学習内容の習得とともに、考える学習へのつながりについても考えていく必要がある。

これらのことから、次の2点を寒川町の中学校の今年度の傾向として定義する。

中学校の傾向

- ① 基礎的・基本的な学習事項については、年度ごとにばらつきがあり、知識の習得について継続的な取り組みが必要である。
- ② 何について考え、何を活用して課題解決に向かうか、そのつながりを意識した学習基盤を整えることが求められている。